

タローGO

健司が駐在所の机にむかって日誌を書いていると電話が鳴った。

「犬が捨てられています。助けてあげてください」

悲鳴のような女性の声が響いた。

「落ち着いてください。状況がよく分からないのですが」

「愛宕山展望台の裏の林に子犬が三匹捨てられています。木にひもでつながれていてかわいそうです。それに水も食事与えられていないようなので、はやく助けてあげてください」

「あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

「それはちょっと」

女性は通りすがりのもので、すぐに家に戻らなければならないと事情を説明すると電話を切った。

健司は迷った。駐在所には、よく匿名の電話がかかってくる。中にはガセネタも多い。そうは言っても、通報をうけたからには、確かめにいかなければならない。もうすでに午後5時を過ぎている。現場まで30分ほどかかる距離だ。

「美沙、ちょっと出かけてくる」

健司は、奥の妻に声をかけた。美沙に事情を説明すると、「本当の話なの？」とちょっと不機嫌だ。もうすぐ夕飯のしたくができるという。

「先に、詩織と一緒に食べていてくれ」

健司は、そう言って自転車にまたがった。

娘の詩織は食が細く、妻の美沙は心配していた。詩織はお父さん子で、健司が食卓についていれば、少々嫌いなものでも口にする。

現場に着いたときには、あたりはとっぴりと日が暮れていた。もうすぐ雪が降る季節だ。コートを着てきたが、寒さが足元からよじ登ってくる。展望台の街灯が頼りなげにともっている。健司は、裏の林にむけて懐中電灯を向けた。暗くてよくみえない。やはりガセネタだったのだろうか。

その時、かすかな鳴き声が聞こえた。弱々しいが、確かだ。健司は、その声をたよりに林の中に向かった。すると、少し入った先に子犬がみえた。三匹いる。急いで駆けつけると、クビをひもでゆわえられて無理やり木にくくりつけられた子犬が横たわっている。そのうちの一匹が、かすかに声をたてている。

「なんとむごいことを」

健司は思わず顔をしかめた。子犬らは必死に逃げようとしたのだろう。クビのまわりにうっすらと血がにじんでいる。食事も水も与えられずに、この寒空に放置されていたのだ。健司は、声をたてない二匹の犬に手を触れたが、すでに

冷たくなって息絶えていた。

健司は、まだ息のある子犬を抱き寄せ、クビからひもをほどいてやった。子犬は、健司の手の中でぐったりしている。水筒から水を出し、手のひらに載せて含ませようとしたが、反応がない。仕方なく、健司は水を無理やり、子犬の口に持っていった。すると、子犬は少しだけ舌を動かした。その後、健司は少しずつ水を口に含ませた。

悩んだ末、健司はすでに死んでいる二匹は、その場に残して、生きている子犬を知り合いの獣医のところまで運ぶことにした。その動物病院の院長はすでに晩酌をはじめていたようで、赤い顔をして出てきた。

少し迷惑そうに子犬の様子をみて

「こいつは無理だろう」

と言った。

「まあ、応急処置だけはしておくから、ここに置いていけ」

健司は、酔っ払いにまかせてよいかどうか迷ったが、医者ではない自分にはどうすることもできない。その後、保健所に頼んで死んだ二匹の犬の始末を頼んだ。少し嫌そうだったが、放置しておくわけにはいかない。

次の日、健司は、あの子犬が心配になって、動物病院に向かった。獣医は

「おまわりが、こんな犬のために仕事をサボっていいのか」

と冗談まじりに言った。

「心配ない。こいつは丈夫だ。峠は越したよ」

そして、ケージのひとつを指差した。

覗くと昨日の子犬がすやすやと眠っている。よく見ると、骨と皮ばかりで、貧相である。どうやら、獣医は一晩つきっきりで看病してくれたらしい。酒好きで言葉は乱暴であるが、気は優しいのだ。

健司は、身勝手な飼い主に腹が立った。避妊処理もせずに子犬を産ませたうえ、残酷な処分をする。最近のモラルはどうなっているのだろうか。

獣医は健司に聞いた。

「二、三日もすると元気になるが、どうする？」

「どうするって？ どういうことですか」

「引き取り手がなければ、保健所に連絡するしかない。そうすれば、安楽死が待っている」

「殺すのですか？」

「仕方がないだろう。飼う人間がいなければどうしようもない。野生化して狂犬病にでもなったら大変なことになる」

健司は悩んだ。妻の美沙に相談してみよう。心の中では、この子犬をひきとる

ことに決めていた。

犬を飼うかもしれないといったら小学校に上がったばかりの娘の詩織は大喜びだった。前から犬を飼いたいと言っていたからだ。

どうやら同級生の家でスピッツを飼っているらしい。しょっちゅう出かけっては、遊ばせてもらっているようだ。前から、自分も白のスピッツを飼いたいと騒いでいた。

「でも雑種なんでしょう」

美沙はいやそうだ。

獣医は、秋田犬が少し入っているが雑種だと言っていた。

「すこし大きくなるらしい」

「私は嫌だわ」

「でも、誰も引き取り手がなければ、殺すしかないそうなんだ」

「そうなの」

美沙は憤慨したように言った。

その時、詩織が大声で泣き出した。

「そのわんちゃんがかわいそう」

そういうと、なかなか泣き止まない。

健司は後悔した。軽率だった。子供の前で犬を始末するなんて話をすべきではなかったのだ。

美沙は降参したように

「わかったわ。うちで引き取りましょう」

と言った。

「でも詩織もちゃんと世話をするのよ」

と釘をさすのを忘れなかった。

子犬は、本当にやせっぽちで小さかった。

「しばらく家の中に置いてやるか」

「でも、おしっことかしない」

「それはしょうがないだろう」

すると、詩織が子犬を抱き上げ

「わたしが世話するからいい」

と言って、部屋につれていった。

詩織は、本当は白のスピッツが欲しかったはずなのだが、茶毛の犬でも満足のようなのだ。

「名前をつけようよ」

と詩織が言った。

「タローにしようか」

健司は迷わず宣言した。男の子が生まれたらつけようと思っていた名前だ。妻の美沙は

「平凡すぎない」

と不満そうだが、詩織はもう

「タロー、タロー」

と子犬のことを呼んでいる。これで決まりだ。

タローは、健司たち家族の愛情をうけてすくすくと育った。最初はヨチヨチ歩きで、詩織に抱っこされていたが、半年もすると詩織よりも大きくなってしまった。とても家の中では飼えない。

そこで、健司は大きめの犬小屋をつくってやった。詩織もペンキ塗りを手伝って、最後にタローという字を書いた。

タローは自分の新居にはまったく興味を示さず、犬小屋に押し込んでも、まったく落ち着かず、夜には何度も悲しそうな声を出した。自分を家に戻して欲しいということだろう。散歩から帰ってくると、当たり前のように家の中に入ろうとする。かわいそうな気もしたが、甘やかしてはいけない。タローをあきらめさせるのに二週間もかかった。

顔もあれほど愛くるしかったのが、ごつくなってしまうと、どちらかという滑稽である。鼻のまわりが黒いので、何かまぬけな泥棒という印象を与える。それでも詩織にとってはかわいい愛犬である。美沙との約束とはいえ、毎日きちんと散歩につれていくのは、それなりに愛情をそそいでいるからだろう。

友達の女の子が白いスピッツを連れて優雅に散歩しているのに比べて、どちらがつれているのか分からない詩織とタローの連れは、傍から見るとこっけいであったが、詩織はそれでもかまわないようだ。

スピッツを連れた友達から

「詩織ちゃんちの犬は変な顔ねえ」

といわれても、ちょっとくやしそうな顔はするものの、平気のようである。

小さいころからタローを知っている家族からすれば、それは、それでかわいいものなのだ。

家族の悩みはタローが芸を覚えなことだ。どうやら、覚える気もないらしい。お手といってもいっこうに手を出さない。待てといっても、食事をもってくればすぐに手をだす。それどころか、下手に食事をとりあげようものなら、ほえて威嚇する。意地がきたない。美沙と詩織はなんとか芸を覚えさせようと頑張っていたようだが、しばらくするとあきらめてしまった。

おまけに、タローは、からっきし意気地がなかった。詩織の友人がつれてくる小さいスピッツにほえられただけで、すぐに詩織の後ろに隠れてしまう。これだけ図体がでかいのだからと思うのだが、とにかく他の犬がくれば逃げ回ってばかりである。

一年ほどすると、タローはもっと大きくなった。体重は 60kg はあるだろう。秋田犬のほかにも、別の大型犬の血が混じっているのかもしれない。詩織では散歩もままならなくなった。

外見だけからすれば、立派な獺犬であるが、相変わらず、芸を覚えず、食事にも意地汚く、しかも自分よりもはるかに小さい犬から逃げ回る臆病者である。これだけからだが大きくなると、もはや、美沙と詩織の手にはおえない。ついに、散歩係りは健司にまわってきた。とは言っても、駐在所の仕事は忙しい。そうそうタローのことにかまっていられない。かわいそうな気もするが、どうしようもないのだ。

妻の美沙が一度、散歩に連れて行っただが、一回でいやになったようだ。何しろ、臆病者ではあるが、図体はでかい。美沙の力では、どうしようもないのだ。

健司は、巡回に自転車ででかける。健司が外に出てくると、タローは散歩に連れて行ってもらえると思って、うれしそうにしっぽをふるが、健司がそれを見無視して自転車でまたがると悲しそうな声を出してほえる。かわいそうだが、しょうがない。

ある時、健司は警邏にタローも一緒に連れて行ってみることにした。番犬としては役に立たないが、ものはためしである。最近では、健司が自転車を引っ張ってくると、自分は連れていかれないものとタローはあきらめている。しっぽも振らない。

「現金なやつだな」

と健司は半分苦笑いしながら、長めの散歩ひもを取り出した。タローは、いったいなにが起きるのか思案顔である。

そして、首輪にひもを結ぶと、おやっというような顔をした。そして、その後は、満面の笑み（犬が笑うとしたらだが）を浮かべて、シッポをちぎれんばかりにふっている。

「なんの気まぐれかしらないが、ご主人様は、自分を散歩につれていってくれるようだぞ」

そう思っているのだろうか。

最初はぎこちなかったが、次第になれてくると、タローは健司の自転車にあわせてうまく走るようになった。一週間もすると、健司は、何の違和感もなく

自転車をこげるようになった。タローは健司の走りに合わせているのだ。

「できが悪いと思ったが、タローには才能があったか」

健司はタローを少し見直した。

タローは警邏の先々で人気者となった。なにしろ人懐こい。頭をなでられるとクークーと鳴きながらシッポをふっている。誰かを威嚇したり、ほえたりすることもない。巡回先に、小さい犬がいると健司の陰に隠れておびえる。その様子が、どうにも面白いらしい。あれだけ図体がでかいのに、小さい犬にも負けてしまう。そのミスマッチがいいのかもしれない。

しだいに、健司とタローのコンビは田舎町のちょっとした話題になった。駄犬をつれたお巡りさん。しかも、その犬は警察犬には程多く、小型犬にはおびえるし、泥棒相手でも愛嬌をふりまきそうである。

しばらくすると、鈍重で不摂生の賜物という体つきをしていたタローが、精悍になっていった。毎日、健司の自転車の後をついて走っているのだから、当然かもしれない。臆病な性格は変わらなかったが、格好だけみると、警察犬と呼んでもおかしくない。詩織は図に乗って「名犬タロー」と呼び出した。

というのも、それまでは散歩に連れ出しても言うことを聞かず、前から子犬が来たと言っては後ろに隠れ、えさをくれそうな人がいれば、シッポをふって追いかけていったのが、ちゃんと詩織の指示にしたがって後をついてくるようになったからである。ただし、お手やおあずけの芸ができないのは相変わらずで、芸を仕込むということを家族はとうにあきらめていた。

健司は、その頃、ある人物に悩まされていた。半年ほど前に駐在所の管内に引っ越してきた藤田夫婦である。近隣の住人とトラブルを起こしているのだ。主人の五郎はもと暴力団というふれこみで、獰猛な犬を番犬に飼っている。時々、放し飼いにしているので、子供が危険だと駐在所に苦情の申し出があった。すぐに健司は、鎖でつなぐように命じたのだが、その場では分かったと言ったものの、どうやら、その後も時折、放し飼いにしているらしい。

夫人の八重子の方は、もと水商売の女性らしく、姉御肌で気風はいいのだが、住民としてのルールを無視しているようだ。しょっちゅうゴミの日を間違えては、トラブルとなっている。つい先日、夜中まで大騒ぎしてまわりから注意されたようだ。それが、夫婦には面白くないらしい。

つい最近になってやっかいな事件が起きた。近所の子犬がかみ殺されたのである。飼い主は半狂乱で駐在所に訴え出た。

「あのきちがい夫婦の狂犬がうちの子を殺した」

と。しかし、確たる証拠があるわけではない。健司には、どうすることもできなかった。せいぜい犬を放し飼いにしないようにと、夫妻に注意する程度であ

る。ところが、藤田夫婦は、放し飼いなどしていないと言い張るばかりで、埒が明かない。

その後も、近隣の猫やペットに被害が続いた。腹に据えかねた住民は、仲間をつのって夫婦のもとに抗議に出かけた。

「この町から出て行け」

最初は、住民の抗議を無視していた藤田家だが、ついに夫の吾郎が猟銃を持って現れた。しかも、銃口を集まった住民に向けたのだ。あわてた住民たちは、ちりぢりになって逃げたが、この話は、県警本部まで伝わったようだ。しかし、県警は、被害も出ていない住民どうしのケンカに警察がしゃしゃりでるわけにはいかないと、駐在所に、今後も注意深く見守るようにと指示してきただけであった。

この無責任さには住民は激怒した。警察はあてにならない。健司は、しかたなく藤田家に向かい、「猟銃を出すとは何事か」と抗議をしたが、吾郎は、家のまわりを大勢の人間に囲まれたので、身の危険を感じたから仕方なくやったなどと正当防衛を言い張る始末である。

しかし、健司の注意が功を奏したのか、それ以降、藤田夫妻はめだった行動をしなくなった。番犬もきちんと鎖でつないでいるようである。健司は、時折、付近を警邏するようにした。住民も、それを歓迎している。もちろん、タローも一緒である。

行く先々でタローは大歓迎された。図体はでかいが人懐っこい。誰にでも媚を売る。ただし、藤田家のそばを通ろうとすると、あの獰猛な犬が怖いのか、シッポをまるめて後ずさりする。やはり番犬には向きそうもない。

それから、しばらくして藤田家から離れたところで事件が起きた。詩織の同級生が飼っていたスピッツが野犬にかみ殺されたのだ。その少女の証言では、散歩に出かけた先で、突然、野犬に襲われたという。その時、スピッツは果敢にも飼い主の少女を守るために、その野犬に向かっていったらしい。少女は必死になって、近所の民家に助けを求めた。しかし、襲われた場所に戻ると、のどを噛み切られて息絶えているスピッツを見つけたという。小学校二年生の彼女には残酷な場面であっただろう。

詩織によると、少女は自分のせいだと言って泣き臥せているという。学校にもしばらく出てこないそうだ。相当のショックだったにちがいない。ところが、少女から思わぬ証言が出た。襲ってきた野犬は首輪をしていたというのだ。それならば、野犬ではなく、どこかで飼われていたということになる。

そして別の情報が健司のもとに寄せられた。藤田吾郎が近所ではなく、自宅から離れたところで、飼い犬を放しているというのだ。彼は、散歩に犬を連れ

出し、そこで、犬を放っているという。

「もしかしてスピッツを殺したのは、藤田の犬かもしれない」

健司は疑った。そして、藤田を尾行することにした。

さすがに尾行にタローを連れ出すことはできない。ひとりで出かける健司をタローはうらめしそうに見ていたが、今日は連れて行けない。

「詩織が学校から帰ってきたら、散歩に連れてってくれるよ」

そういい残すと、健司は藤田家に向かった。今日は警察官の制服ではなく、私服を着ている。

近所のひとの目撃談によると、藤田吾郎は火曜日の午後に犬を外に連れ出しているようだ。そういえば、スピッツが野犬にかみ殺された事件の日も火曜日であった。

健司は、藤田に気づかれないように、距離を置いて尾行した。いまのところ、犬は散歩用の鎖につないだままである。しばらく歩くと、駐在所のある裏山の方に吾郎は向かった。

「これはまずいな」

健司は迷った。山道は見通しがよいので、かなり距離をあけないと相手に気づかれてしまう。しばらく考えたすえ、健司は、細心の注意をはらいながら、後を追うことにした。「今日こそ、きっと証拠をつかまえてやる」

山に入って 20 分ぐらいすると、相手の動きがとまった。どうやら犬を放したらしい。すぐにも行って確かめたいが、相手に悟られたら終わりである。健司は、山道から離れて山の斜面の林伝いに藤田との距離を縮めた。すると林の切れ間から 50 メートル先に藤田の姿がみえた。林がえぐれたような休憩場所で、ひとりでタバコをすっている。やはり、藤田は家から離れたところで飼い犬を放していたのだ。

ふと気づくと、藤田は長い筒のようなものを携えている。タバコを林に捨てると、藤田は立ち上がって筒の入った袋からあるものを取り出した。猟銃だ。そして、狙いをすましたように、銃をいろいろな方向に向けている。まさか打つわけではあるまい。その時、一瞬、藤田の構えた銃口が健司をとらえた。尾行がばれたかとひやとしたが、それは取りこし苦労だったようだ。

その時、藤田のもとに犬が帰ってきた。何かをくわえている。そして、得意そうに足元に獲物を置いた。あれはなんだろう。なにかの小動物のような気がする。ここで気づいた。藤田はちょっとした狩猟をきどっているつもりなのだ。あの犬はやはり猟犬なのだろうか。

しかし、遠すぎて獲物の正体が分からない。健司は、その正体が確かめたくて、林の中を進んだ。どうやら子犬のようにもみえる。首のあたりが赤くなっているのは出血のあとだろう。健司は必死になって進んだ。今日こそ、動かぬ証拠をつかまえてやる。

その時、うかつにも足をすべらしてしまった。山を登るときよりも降りる時のほうが大変なのだ。何とか木の枝につかまろうとしたが、バランスをくずしたうえ、頼りない枝が折れてしまった。そのまま、健司は坂を滑り降りた。

「誰だ！」

藤田のするどい声がした。藤田は持っている猟銃を林に向けた。どうやらばれてしまったようだ。とんだヘマをやってしまったが、こうなっては仕方がない。健司は覚悟を決めた。

「藤田さん、わたしですよ。駐在の中山です」

林を掻き分けて下に降りていった。足首が痛い。どうやら捻挫でもしたようだ。林から出てきた健司をみて藤田は意外そうに聞いた。

「なんで駐在がこんなところに居る？」

「今日は非番だったので、きのこ採りにきていたんですよ」

藤田は疑い深い目で健司を見た。まさか、尾行してきたなどとは言えない。幸い、制服ではなく私服だったので、こんな言い訳が思いついた。

健司は、藤田の足元に目をやった。やはり小型犬だ。しかも、首輪がついている。ということは、どこかの飼い犬だろう。首から血を流していて息をしていない。藤田は、健司の視線に気づいたようだ。

「こいつは、まずいところを見られたかな」

そういつて、健司をきつとにらんだ。駐在がどう出るか探っているのかもしれない。

「この犬はどうしたんですか。飼い犬ですよ」

「そのようだな。だが、どこの犬かは知らんよ」

横の犬が獰猛な目で健司を見据えている。まるで獲物を狙うような目だ。

「おたくの犬は危険です。ただではすみませんよ」

と健司は言った。藤田も、これ以上開き直りはできなであろう。

「だとしたらどうする」

「保健所に引き取ってもらいます」

「それはできんな」

そういつと、藤田は健司に銃口を向けた。まさか、殺すつもりではないだろう。

「藤田さん、あなた、こんなことで殺人を犯す気か？」

健司は必死だった。

「いや、そんなことはもちろんせんよ」

そういいながらも、藤田は銃口を健司からはずさない。

「しかし、事故死というものはある」

「事故死？」

「ああ、きのこ採りにきていた警察官が野犬に食い殺される。それならば、殺人罪にはならないだろう」

健司は、藤田の意図をさとった。この犬に健司を襲わせるつもりなのだ。のどを噛み切られれば一巻の終わりだ。すでに猟犬は戦闘態勢に入っている。低く構えて、飛びかからんばかりだ。

健司は、何か防御に使えるものがないか、まわりを探したが、何も頼りになるものは落ちていない。これで、足が自由ならば逃げることもできるが、捻挫でいためた箇所は、ますます痛みが増している。

「ジロー、そろそろ獲物をとらえるか」

藤田はにやっと笑った。

健司は心の中で叫んだ。

「ジローだって！」

その時、健司は猟犬の名前をはじめて知った。タローよりも下ではないか。ジローよりもタローの方が偉いんだ。

「いけ」

そう藤田が言葉を発したとき、どこからともなく大型犬が現れた。ものすごいスピードでかけてくる。しかも、猟犬を威嚇するような大きなほえ声を出している。猟犬は、思わぬ敵の登場に一瞬ひるんだようだ。どちらを攻撃するか迷っている。

その一瞬の躊躇が猟犬の隙となった。大きな影はあっという間に猟犬に近づき体あたりを食わせた。驚くことに、あの獰猛な犬が数メートルも吹き飛ばされた。

「タロー！！」

健司は驚いた。やってきたのは、あのタローではないか。

二匹の犬は互いに対峙したまま、うなり声をあげて一步も引かない。

「嘘だろう。あのタローが」

健司には別の犬としか思えないが、姿かたちはタローである。

気づくと、藤田がタローに銃口を向けている。こいつは、本気で撃つつもりだ。健司は足の痛みを抑え、必死にジャンプした。そして、かろうじて、藤田の足を捕まえた。バランスを崩した藤田の銃口から放たれた弾は、上空に向かって放たれた。そのまま、健司は倒れた藤田を押さえつけようとした。

「絶対にタローを助ける」

しかし、相手も必死だ。銃で頭をしたたかに叩かれ額から血がにじんだ。それ

でも、ひるむわけにはいかない。

一方、対峙していた二匹の犬は、銃声を合図に均衡が破れた。猟犬のジローがタローに襲い掛かったのだ。するどい牙がタローののどをねらっている。

「タローはやく逃げろ」

健司は、藤田を押さえにかかりながら、タローのことが心配だった。こんな獰猛な犬に適うわけがない。小型のスπιッツにさえシッポを巻いて逃げ出す弱虫なのだ。

ところが、タローは相手の攻撃をたくみにかわすと、猟犬の足にがぶりと噛みついた。ふいをつかれた猟犬は、自由を奪われ、なすすべもない。タローは必死に噛み付いて、放そうとしない。完全に形勢はタローに向いている。

「こいつジローになにしゃがる」

藤田は、健司を振り払うと、寝たままの姿勢で銃をふたたびタローに向け、一発はなった。健司も必死に止めに入ったが、今度は間に合わなかった。

タローから血しぶきがあがるのが見える。

「タロー！」

タローはどっと倒れた。猟犬は勝ち誇ったように、タローに攻撃をくわえようとして立ち上がった。しかし、そのままバランスを失って倒れてしまった。その足はタローによって食いちぎられていたのだ。そのまま猟犬もばたっと倒れた。

「ジロー」

藤田は猟犬に近寄ろうとした。これがチャンスと、健司は後ろから飛び掛った。足が不自由なのだが、全体重をかけてタックルをかけた。相手が死んでもかまわないと思った。藤田は、健司の必死のタックルにもんどりうって倒れた。その時、岩にでも頭をぶつけたのだろう。そのまま昏倒した。

健司は、必死になってタローのもとへ這っていった。あの弱虫のタローが自分を助けるためにきてくれたのだ。しかも、凶弾に倒れてしまった。タローは横になったまま、じっと動かない。

「タロー」

健司は、そう声をかけると、その大きな体を抱きしめた。

「お前はなんてばかなんだ」

涙がとまらない。

しばらくして、数人の大人が現場にやってきた。助けにきてくれたのだ。

「駐在さん大丈夫ですか」

「わたしは大丈夫です。それよりもタローをお願いします」

そういうのがやっとだった。見ると、詩織がいる。顔は蒼白だ。

「お父さん、大丈夫？」

「ああ、俺は大丈夫だ。だけどタローが、タローが俺を助けようとして銃で撃たれた」

その後は言葉にならなかった。タローは首筋から血を流し、じっとしたままである。

藤田は、その場で逮捕され、県警本部からやってきた刑事に連行されていった。健司は足の軽い捻挫と、銃でうたれた打撲傷だけだった。それほど重症ではない。

タローは、例の動物病院に連れていかれた。詩織がつきそっていったらしい。つぎの日、健司と詩織はタローを迎えてにいった。あの口の悪い獣医のもとへ。タローの容態が心配だったからだ。

心配そうなふたりを迎えた獣医は

「こいつは、本当に弱虫だな」

と言って笑った。

「けがなんかしちやいないよ。ちょっと首筋を弾がかすっただけ。それで気を失ったんだ」

「なんですって！」

健司は安心した。それにしても、犬でも気を失うのだろうか。獣医が指差したケージを覗くと、タローがすまなそうにクークーと喉を鳴らした。

健司と詩織は、タローを連れて家路についた。

詩織の話によると、散歩をせがんだタローを連れて、いつものコースを歩いていると、突然、タローが制止をふりきり山道を駆け上がっていったのだという。

タローが心配だったが、もう夕方である。しばらくタローが戻ってくるのを待っていたが、突然、銃声が聞こえた。それで近所の家まで行き、事情を説明して助けを請うたのだという。

「ねえお父さん、タローは本当に助けにいったの？」

詩織には信じられないだろう。

健司は笑って何も言わない。「タローは本当の英雄だよ」と言おうとしたが、それは自分の心の中にしまっておくことにした。

その時、前からチワワを二匹つれたご夫人がやってきた。

「かわいい！！」

思わず詩織がそう叫んだ。

健司はタローをみて驚いた。シッポを巻いて詩織の陰に隠れている。

「うそだろう。相手はこんなちっちゃいチワワだぞ」
と健司は思った。

あのタローの活躍は夢の中のできごとだったのだろうか。いや、そんなことはない。その証拠に、自分はタローのおかげで助かったのだ。

チワワを連れた夫人が通り過ぎると、タローは何事もなかったように、ふたりを先導しだした。

「タローありがとう」